

2022年7月24日（日）「真理を見極める目」

ガラテヤ 5:7-12

7 あなたがたはよく走っていたのに、誰が邪魔をして真理に従わないように勧めたのですか。8 そのような勧めは、あなたがたを召し出しておられる方から出たものではありません。9 僅かなパン種が生地全体を膨らませるのです。10 私は主にあつて、あなたがたが別な考えを持つこととはないと確信しています。あなたがたをかき乱す者は、誰であろうと、裁きを受けます。11 きょうだいたち、私が今なお割礼を宣べ伝えているとするなら、今なお迫害を受けているのは、なぜですか。割礼を宣べ伝えているなら、十字架のつまずきは無効になっていたことでしょう。12 あなたがたをかき乱す人は、自ら去勢してしまえばよいのです。

#### 【序論】

今日は「そもそも論」から始めたいと思います。改めて、私たちが教会に集っている目的とは何でしょうか。その目的のために、私たちは毎週教会に足を運んでいるはずで、シンプルに言えば、それは「礼拝するため」であります。私たちが礼拝者であるためには、その前提として救われていなくてはなりません。救われるためには福音が語られなくてはならない。ですから、私自身が教会において一番大事だと思っていることは、福音の真理が守られ／語られているということです。この軸がぶれてしまうと、教会は教会でなくなってしまうでしょう。真理を守り続けるためには慎重でなくてはなりませんが、崩れるのはいとも容易いものです。時代に柔軟に対応しつつも、曲げてはならないものがある。このバランス感覚を持って、「真理を見極める目」を養っていきたいと思います。

#### 【本論】

ご一緒に学んでいるガラテヤ書には、福音の真理を堅持しようとするパウロの並々ならぬ思いが溢れています。ガラテヤ教会は、教会にとって最も大切な真理（恵みに生きる道）を失いかけていました。教会が教会たり得なくなろうとしていたのです。そのような危機に直面している教会の目を醒ませようと、パウロは過激なことばを用いることさえ厭いません。今日の箇所では、「パン種」「裁き」「つまずき」「去勢」といった、耳につく単語が次々と出てきます。

## 本論 1. 真理ならぬ教えの拡大

あなたがたはよく走っていたのに、誰が邪魔をして真理に従わないように勧めたのですか。そのような勧めは、あなたがたを召し出しておられる方から出たものではありません。(5:7-8)

パウロはまず、ガラテヤの信徒たちの以前の状態を褒めるところから始めます。元々彼らはパウロが伝えた福音に従って忠実に歩んでいたのです。すなわち、律法から自由にされた喜びに溢れて生きていた。その証拠として、当初ガラテヤ教会内ではユダヤ人と異邦人の区別はなく、互いをそのままの姿で受け入れ合うことができていました。ところが、「救われるためには律法の行ないも必要だ」と主張するユダヤ主義者が教会の内政を担うようになってから、雰囲気が一変しました。彼らは、異邦人の信徒たちに対し、救いの条件として割礼を要求してきたのです。彼らの主張は旧約聖書に基づいており、ある種の説得力を持って迫ってきました。そして、その説得に心がひるんで次々と割礼を受ける信徒たちが現れ始めました。

パウロはこの状況をどのように知ったのでしょうか。ガラテヤ教会の状況を知らせる手紙を受け取ったのかもしれませんが。割礼が救いの条件とされることに疑問を抱いた信徒の誰かが、パウロに相談の手紙を書き送ったのではないか。これを聞いたパウロは衝撃を受け、本書簡を直ちにしたためてガラテヤ教会宛てに送ったのでしょうか。彼はここで、ユダヤ主義者らが「邪魔をし」、信仰の道を真っ直ぐに歩むのを妨害していると言っています。更に、彼らに聞き従うことは「真理に従わない」ことだとも警告しています。「真理」とはキリストご自身を指し、福音そのものであると言ってもよい。神が無条件に罪人を愛し受け入れてくださるという真理。もし人間側の条件が付け加えられるなら、それは神から（あなたがたを召し出しておられる方から）出たものではありません。

僅かなパン種が生地全体を膨らませるのです。(5:9)

「パン種」とは、パンを焼くときに生地に混ぜてパンを膨らませるものですが、小麦粉の量に対して本当に微量であるというのに、パン生地を信じられないほど膨らませてしまうのに驚かされます。最近我が家でもパンを焼く機会があり、馴染みあるものとなってきました。さて、この「パン種」、パンを美味しくいただける「良いもの」であるはずなのですが、聖書ではしばしば「悪」「間違った教え」を象徴する言葉として登場します。少量のパン種が生地を大きく膨らませるように、小さな原因が教会全体を腐敗させる。律法主義が福音に調合されると、福音そのものをダメにし、教会を教会でなくしてしまうということです。

## 本論 2. 自分の目で真理を見極める

**私は主にあって、あなたがたが別な考えを持つことはない**と確信しています。あなたがたをかき乱す者は、誰であろうと、裁きを受けます。(5:10)

ここでのパウロの口調から注意深く読み取るべきことがあります。それは、パウロが最も責任を問うているのは信徒たちではなく彼らを惑わしているユダヤ主義者であるということです。人に真理の道を踏み誤らせる者の罪は重い。これは主イエスも異口同音に言われていたことです。

**しかし、私を信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、ろばの挽く石臼を首に懸けられて、深い海に沈められるほうがましである。**(マタイ 18:6)

教会の指導者は最もサタンに狙われやすい。それは、群の導き手を潰せば、群全体が傷つき力削がれるからです。ガラテヤ教会を霊的に導いていた人がまず律法主義の虜となった。そして、教会全体にその傷が広がりました。

それにしても、指導者層に対するパウロの宣告は大変厳しいものがある。「**あなたがたをかき乱す者は、誰であろうと、裁きを受けます**」と、キリスト者でありながら神の裁きの対象であるとまで言われています。「**誰であっても**」と言うところには、「教会の重積を担っている人であれ」という意味が込められていますが、1:8では何と「天使」までもが裁きの対象となりうると言われていました。

**しかし、私たちであれ、天使であれ、私たちがあなたがたに告げ知らせた福音に反することを告げ知らせるなら、その者は呪われるべきです。**(1:8)

ここで、信徒の皆様心に留めておいていただきたいことがあります。それは、どんな時にも自分の目で真理を見極める努力を惜しまないでいただきたいということです。牧師が言っていることが常に正しいかどうかは分かりません。いつも聖書的な根拠を探り、真に福音が語られているかどうかを確かめる習慣が大切です。このような姿勢は、使徒 17 章に出てくるベレアの信徒から学ぶことができるでしょう。

**きょうだいたちは、直ちに夜のうちにパウロとシラスをベレアへ送り出した。二人はそこに到着すると、ユダヤ人の会堂に入った。このユダヤ人は、テサロニケのユダヤ人よりも素直で、非常に熱心に御言葉を受け入れ、そのとおりかどうか、毎日聖書を調べていた。**

(使徒 17:10-11)

私たちは、最後は自分で真理を探求できるよう力を養っていかなくてはなりません。私も神学校にいた頃は先生方にいくらかでも質問できましたが、現場に出てからはほとんどのことを自分で調べなくてはならなくなりました。信仰における自立、真理を探求することにおける自立を余儀なくされたのです。

### 本論 3. 恵みのみ、信仰のみ

きょうだいたち、私が今なお割礼を宣べ伝えているとするなら、今なお迫害を受けているのは、なぜですか。割礼を宣べ伝えているなら、十字架のつまずきは無効になっていたことでしょう。(5:11)

本節から読み取れることは、ガラテヤの信徒たちが、割礼を受けるべきか否かの問題においてパウロがどういう姿勢を採っているのかをあまり知らなかったのではないかと、いうことです。以前にも取り上げたことがあります、パウロは使徒 16:3 において、ユダヤ人につまずきを与えないようにとテモテに割礼を施したという経緯があります。ここには、母方がユダヤ人である場合は「ユダヤ人」と見なされるため、本来は乳児期に割礼を受けていなければならなかった、その「ユダヤ人としての義務」を果たしたという意味がありました。しかし、このことを逆手に取って、「パウロは行先によっては割礼を施したり施さなかったり、一貫性がない」と非難する人々がいたのでしょう。しかしパウロの基本姿勢は、異邦人に割礼は不要であり、そのままの姿で神の恵みにあずかることができるということでした。つまり、ユダヤ人はユダヤ人のままで、異邦人は異邦人のままで。罪人は聖くなったら救われるのではないのです。そんなことは不可能であるから、神の無条件の愛が必要だったのではありませんか。割礼とは、「神の恵みだけでは不十分です」という意志表明にほかならないのです。

パウロは無割礼の救いを宣べ伝えたことによって、ユダヤ人の迫害に遭いました。パウロが迫害を受けていることを知らない信徒はいなかったのでしょう。迫害を受けている以上、パウロが宣べ伝えているものは「恵みのみ」「信仰のみ」であったのです。これを語るとなぜ迫害を受けるか。それは、神の恵みそのものであるイエスの十字架は、ユダヤ人をつまずかせるものだったからです。十字架に架かり給うた主イエスを見上げるだけで救いにあずかれるという考えは、ユダヤ人にとって受け入れ難かった。

この後で歌う聖歌 424 番「ただ信ぜよ」の歌詞は、律法主義、割礼推進派の考えに真っ向から対立するものです。1 節の歌詞を読みましょう。

**十字架に架かりたる 救い主を見よや**

**こは汝が犯したる 罪のため**

**ただ信ぜよ 　ただ信ぜよ**

**信じる者は誰も 　みな救われん**

私たちもこのように信じているのです。この「自力」を捨て去った生き方を見て拒絶反応を起こす人がいるならば、そこには「十字架のつまずき」が起きていると言えるでしょう。しかし、この「つまずき」は取り除かれてはならないのです。

あなたがたをかき乱す人は、自ら去勢してしまえばよいのです。(5:12)

最後にとんでもない皮肉が語られています。いきなり「去勢」という言葉が出てきてびっくりするのですが、パウロはもちろん「割礼」との関わりでこのことを語っております。割礼とは男性の性器の包皮を切り取る儀式です。この手術がそんなにありがたいなら、いっそのこと性器全部を切り取ってしまえばいいではないかと。実は、申命 23:1 には「**睾丸の潰れた者、陰茎の切り取られた者は、主の会衆に加わることはできない**」という戒めがあり、パウロが暗に「恵みを捨てるならキリストの共同体から除外されることになる」と言っていることが分かります。それほどまでに、神の恵みに人間は何事も付け加えてはならないのです。

### 【結論】

私たちが注意深く調べながら生きていなくてはならないことがあります。それは、自分が神の恵みに何かを付け加えてはいないかということです。真理に混ぜ物をしていないか。どこかに「自力」が入り込んではいないか。純粋な福音に立ち続けることは、信仰の細い道を歩き続けることです。その道に立ち塞がるものをどけていかななくてはなりません。何にでもすぐに飛びつくことをせず、そこで説得されようとしていることがどういう教えなのかを見極める必要がある。世には多くの異端があり、偏ったニュースもあります。すべてのことを聖書の真理に照らして判断していくことができるように、聖霊の力を求め続けましょう。

### 【祈り】

真理の御霊なる神よ。福音を守り続けることは、細い道を歩き続けることに似ています。様々な脇道があり、一見正しいように見えるけれどもそうでないものがたくさんあります。私たちが立つべきところをいつも指し示し、よく御言葉を調べ、祈り、物事を的確に見極める目を与えていてください。すべてのことを聖霊の内的照明によって判断していくことができますように。教会が決して失ってはならない福音を堅持し続けることができるよう、お助けください。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

世の初めから終わりまで、変わる事のない御心を示し給う、父なる神の愛、  
人にまことの救いをもたらし、福音そのものであり給う、主イエス・キリストの恵み、  
信者の心に内的照明を与え、すべての事を聖書に基づいて判断させ給う、聖霊の親しき  
交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。